— 統制感と感情的反応の機能 —

文教大学人間科学部
大木 桃代

Nobuhiko Kanda*¹, Momoyo Ohki*²

*2Bunkyo University, Faculty of Human Science, 3337 Minami-ogishima, Koshigaya, Saitama 343-8511)

Key Words: perceived control, psychological stress, coping behavior, affective response, junior high school students

統制感は人の適応行動に影響を与える認知の変数のひとつで、個人の過去の経験を基に形成される期待であり、自分が期待する結果や成果を自分の行動によってどの程度ひき起こせると考えるかを示すものである。統制感の一つである Locus of control (以下 LOC) を提唱した Rotter (1966) は、LOC を一般期待としての LOC と特定期待としての LOC があるとしている。特定期待としての LOC は、健康や学業などのような

領域ごとに個人が有する期待で当該領域の行動の生起に影響を与えるとされ、一般期待としての LOC は、その個人のさまざまな生活領域での先行経験をまとめた形で作られる期待であるとされる。一般期待としての LOC は新奇な事態や状況が曖昧な事態において個人の行動の予測力が高まるとされている。しかし最近の研究では、一般期待としての統制感が、そうした事態だけでなく、適応（不適応）行動と関連することが示されている。神田（1993）や水口・加藤・神田（1989）は、中学生を対象に不登校欲求や非行との関係で、統制感の高い人（以下高統制感）は、自分の行動が様々な結果の生起に対して効果的であると期待し、適応感を持つ傾向が高く適応行動をとりやすいこと、一方、低統制感の人は、自分の行動が結果に対して効果的でないと考えた傾向が高く、不適応感を抱いたり不適応行動を示すことを、明らかにしている。このようなことからストレス事態において統制感の果たす機能が注目される。

Lazarus & Folkman（1984）は、心理的ストレス過程に影響する個人内要因のひとつとして統制感をあげている。統制感が高いことは、自分が効果的に環境に関わることができると考え、効果的に行動するための情報を積極的に探索する（Pines & Jilian, 1972; Phares, 1968）。また、それに基づき積極的に行動し、ストレス事態を克服しようとする（Brissett & Nowicki, 1973）と考えられる。つまり、ストレス事態における認知的評価にあたって、自らの行動に自信をもつばかりでなく、ストレスへの対処のために積極的な行動を起こすことが期待されるのである。しかしながら、Lazarus らは統制感をストレス過程で考慮するとき、Rotter の指摘した一般期待としての統制感と特定期待としての統制感を明確に区別して考慮する必要があると述べ、一般期待としての統制感の限界を指摘している。

ところで Lazarus らの心理的ストレス過程モデルにおいて、統制感についてどのような位置づけが可能であろうか。特定期待・一般期待それぞれの統制感についてその可能性を検討してみると、まず特定期待としての統制感、個人が過去において類似のストレスを経験しているとすれば、Lazarus らの「ストレス→認知的評価（1 次的評価・2 次的評価）

→コーピング→ストレス反応」の過程において「認知的評価」と「コーピング」の段階に影響を与えると予想される。つまり、認知的評価については、ストレスが関連する当該の領域について自分が効果的に対処できるという期待（つまり高統制感）を持っていれば、情報収集やそれらと自分の行動レパトリーとの照合を積極的に行い、的確な評価が可能となり、さらにコーピングの段階では高統制感が積極的な対処行動の展開に関与することが考えられる。

では、一般期待としての統制感（以下、一般統制感）はどうであろうか。上述のように心理的ストレス過程の認知的評価の段階では、個人が過去において類似のストレスを経験している場合、特定期待としての統制感が重要な機能を果たすと考えられる。しかしこれまでの適応行動（不適応行動）や学業成績との関係（神田, 1993）の検討から、新奇な状況や曖昧な状況ばかりでなく、特定のストレス状況においても一般統制感が、ストレス評価モデルの各段階で一定の役割を果たすことが予想される。

さらに筆者たちがここで提案したいことは、一般統制感が感情的反応に与える可能性についてである。ここでいう感情的反応とは、ストレスに遭遇した個人が認知的評価を行う前の段階であられるストレスへの反応として仮定するものである。Lazarus らのモデルでは、認知的評価が感情の生起に影響を与えると述べられているが、あくまでも 1 次的評価と 2 次的評価の結果として感情が生起すると考えるのである。筆者たちが新たに提案したいことは、ストレスへの対処のための認知的評価を行う以前にストレス事態への感情的反応が生起し、次に認知的評価が行われるというものであり、この感情的反応に深く関わる個人内要因の一つとして一般統制感を位置づけるのである。すでに述べたように一般統制感、その個人のさまざまな先行経験に基づいて形成される自分の行動とその結果との関係に関する一般的期待であり、言い換えれば認知的な構えであると言えよう。したがって人がある事態に直面する時、その事態の内容や特性がいかなるものであるかが判明する前から、一般統制感はその個人の感情的反応の傾向に影響を与えていると考えられる。それはストレス事態においても同様であり、ス

トレス事態の認知的評価が行われる以前に一般統制感の高低が感情的反応の傾向を方向づけると考えられる。例えば、進学や進級をして新しい学校やクラスに入る時のことをとりあげてみると、さまざまな情報が不確かなうちから、ある人は不安定になり、ある人は期待に胸をはずませる状況はしばしば見られることであり、この違いがその後の適応行動の差異に関係すると考えられる。こうした相違の背景要因として一般統制感があり、その高低が感情的反応に関与していると考えることが可能である。このように認知的評価に入る前に一般統制感を背景にストレスに対する感情的反応が生起していると想定した方がわれわれの日常的経験に合致すると言えよう。

これらのことが明らかとなれば、個人の一般統制感の水準をあげることによって個々の領域を超えたさまざまなストレス状況に対する柔軟な対応への構えが形成され、その結果、効果的なストレス対処が可能となる。

そこで本研究では、中学生を対象にその心理的ストレス過程を取り上げ、このプロセスの先行要因としての一般統制感との関連性を検討する。特に、個人の一般統制感がストレスに対する最初の感情反応に影響を有するか否かを検討する。同時に、一般統制感と最初の感情的反応が対処行動に影響を及ぼすか否かについても検討する。

ストレスに対する反応としては、ネガティブな内容の「落ち込み」的感情（以下、落ち込み）とポジティブな内容の「立ち向かい」的感情（以下、立ち向かい）の2つを想定した。これは予備調査として塾に通う中学生13人に自由記述で回答を求めた結果を分類し仮定したものである。上述のように、高統制感、自らの行動と成果の間の随伴関係について強い期待を持つものであり、一般的なストレス事態に直面したとき、その問題に積極的に関与し、事態を改善しようとする傾向が高いと考えられる。したがって、一般統制感の高い場合は、ストレス事態に対する最初の感情反応として「落ち込み」的であるよりは、「立ち向かい」的であることが予想される。一方、低一般統制感では自らの行動が期待する成果をもたらさないと考えるため「落ち込み」的反応が生起する傾向が高いと予想

される。

また、先に述べたように一般統制感はストレスの認知的評価プロセス全体に関わることが予想される。これについて本研究ではコーピングの段階を取り上げ、Lazarus ら（1984）の対処戦略の分類にしたがい「情動中心の対処」及び「問題中心の対処」と一般統制感との関係を検討する。一般統制感が高い水準にある場合、自分の行動が効果的であると期待するのであるから「問題中心の対処」を中心に行うと考えられる。

方 法

調査対象 東京都多摩地区の公立中学校2校の生徒 1年生69名（男子38名、女子31名）、2年生72名（男子36名、女子36名）、3年生52名（男子33名、女子19名）、合計193名（男子107名、女子86名）。

調査の時期 1996年3月中旬～下旬。

調査材料

- (1) ストレッサー：ストレスフルな経験の想起を求めるために「最近、あなたが体験した、最も苦しい、いやな、困ったできごとを思い出してください。さしつかえなければ、できるだけくわしくそのできごとを書いてください。」という教示を与え、これをストレス経験ととらえることとした。
- (2) 感情的反応：感情的反応として仮定した「落ち込み感情」と「立ち向かい感情」を示すと思われる項目を予備調査の回答と、これまでの筆者の中学生との臨床心理面接経験から得られた知見も参考にし、最終的に13項目を案出し、「かなりあてはまる」、「ある程度あてはまる」、「少しあてはまる」及び「あてはまらない」の4件法で回答を求めた。なお「かなりあてはまる」を4点、「ある程度あてはまる」を3点、「少しあてはまる」を2点「あてはまらない」を1点として分析を進めた。
- (3) ストレス・コーピング：Lazarus & Folkman（1984）の「対処様式測定法」67項目について中学生に難解であると考えられる表現を平易な表現に改めた。また、大木（1993）から表現がより具体的である対処項目23項目を追加した。これら90項目について「か

神田・大木：中学生のストレス対処

なり使った」、「ある程度使った」、「ほんの少し使った」及び「使わなかった」までの4件法で回答を求めた。なお、「かなり使った」を4点、「ある程度使った」を3点、「ほんの少し使った」を2点及び「使わなかった」を1点として以下の分析にあてた。

- (3)一般統制感：神田（1993）によって作成された子ども用主観的統制感尺度を用いた。本尺度は26項目で構成され、4件法で回答を求め、得点が高いほど一般統制感が高いことを示す。

結 果

項目分析

1. ストレッサー 調査時に近い時点でストレスを経験したと報告した者は、調査対象193名のうち163名であった。このうちストレッサーを具体的に記述があったものは、80名余りで「友人関係」を挙げたもの47名、「勉強」を挙げたものは21名であった。具体的な回答例を挙げると、「テストで悪い点数をとったとき」「友達と喧嘩になりそうなとき」などであった。本研究で

は、各ストレッサーのサンプル数が十分でないため、一括した分析のみを行った。

2. 最初に経験される感情 「落ち込み」と「立ち向かい」を想定して13項目を案出したが、これらの項目について因子分析（主因子法、バリッマクス回転）を行ったところ、それぞれに対応する2因子が抽出された（Table 1）。両因子とも因子負荷量が上位5項目を採用した（「落ち込み」因子は因子負荷量が.6以上、「立ち向かい」因子は.4以上の項目）。また各因子を構成する項目群を対象に Cronbach の α 係数を算出したところ「落ち込み」因子については.82、「立ち向かい」因子については.70と比較的高い値が得られ、それぞれの因子の内的一貫性が確認された。そこでそれぞれの粗点の合計を以後の分析の対象とすることとした。これらについて性別と学年を独立変数として、それぞれの反応を従属変数とする分散分析を行ったところ「落ち込み」因子で性別の主効果（ $F(1,144)=6.90$, $p<.01$ ）がみられた。なお「落ち込み」因子の全体の平均値は10.53（ $SD=4.14$ ）、女子11.69（ $SD=4.25$ ）、男子9.60（ $SD=4.70$ ）であった。また「立ち向か

Table 1 対処行動の最初の感情的反応の因子分析結果（N=163）

	Factor 1	Factor 2
[落ち込み反応]		
2 気分がかなり落ち込んでしまった	.78	.08
9 絶望的な気持ちになった	.77	.12
11 泣きたい気持ちになった	.73	.20
7 みじめな気持ちになった	.71	.22
6 どうしてよいかわからなくて困った	.67	-.15
[立ち向かい反応]		
1 「負けてたまるか」と思った	-.01	.81
10 闘志がわいてきた	-.17	.80
8 怒りがこみあげてきた	.18	.60
5 くやしかった	.35	.59
3 「落ちつかなければいけない」と思った	.27	.40
固有値	4.11	2.07
寄与率	31.62 %	16.04 %

い」因子については、全体の平均値が11.61 ($SD=4.14$)、女子11.14 ($SD=4.47$)、男子12.00 ($SD=3.76$)であった。

3. ストレスへの対処行動 上記90項目中、粗点の平均値が1.5以上の71項目を対象に因子分析（主因子法、

バリッマクス回転）を行った。因子数を2～8まで設定した結果2因子を抽出した。次に因子負荷量が0.4以上の項目のみを対象に再度因子分析を行った。さらにこの手続きを3回繰り返し、最終的に因子負荷量0.5以上の30項目を採用することとした（Table 2）。各因

Table 2 対処行動の因子分析結果

(N=163)

	Factor 1	Factor 2
[情動中心の対処]		
58 「このようなことはすぐに終わってしまえばよい」とか「なければよいのに」と思った	.66	.19
57 実際よりよいように空想したり、想像したりした	.63	.31
41 自分自身が傷つかないように、そのことはあまり考えないようにした	.63	.14
82 マンガを読んだ	.63	.18
77 テレビやビデオを見た	.61	.21
85 ゲームをやった	.61	.17
21 「いやなことをみんな忘れてしまおうと思った」	.61	.23
50 そのことが起こったことを信じようとしなかった	.60	.22
75 部屋で一人になって気持ちを落ちつけた	.60	.19
76 音楽を聴いて気をまぎらわした	.59	.09
60 ただ祈るだけだった	.57	-.05
3 そのいやなことを考えないように勉強したり、遊んだりした	.56	.03
59 そのことがよくなることをひたすら望んだり空想したりした	.55	.21
55 実際に起こったことをなんとか変えられないものか、などと思った	.54	.32
65 そのことが、どの位、いやなことなのかを考えてみた	.54	.36
[問題中心の対処]		
23 そのことで自分が成長して、よりよい人間になった	.03	.69
38 自分が生きていく上で大切なことを再発見した	.17	.68
39 ものがとがうまくいくようにやり方を変えてみた	.26	.68
26 解決のため計画を立てて、それを実行した	.05	.68
6 「うまくいかないかもしれない」と思ったが「何とかしよう」と努力した	.10	.65
62 自分がやるべきことや言うべきことをいろいろ考えてみた	.27	.63
56 自分に関係のある何かを変えてみた	.29	.63
36 新しい自分の考えや信念を持つようにした	.17	.62
2 どこに問題があるかを考えた	.05	.62
46 自分の立場を考えながら、望みをかなえようと努力した	.23	.59
49 どうすればよいかわかっていたので、それがうまくいくように努力した	.12	.58
1 次にやらなければならないことを一所懸命考えた	-.04	.56
37 自分のプライドをしっかりとって、がっかりしないようにした	.21	.56
52 それを解決する方法をいくつか考え出した	.34	.56
30 今までよりもよい経験ができたと思った	.11	.53
固有値	6.48	3.11
寄与率	21.6 %	10.4 %

子については、構成される項目から第1因子は「情動中心の対処」15項目、第2因子は「問題中心の対処」15項目であった。また、各因子を構成する項目群を対象に Cronbach の α 係数を算出したところ、第1因子、第2因子共に .90 という高い信頼性係数が得られた。また、上位・下位検定の結果、有意水準1%以下でいずれの項目も弁別力の高い項目であった。

以下の分析では、各対処を使用した数として把握するために「情動中心の対処」と「問題中心の対処」について、対処としての重要度に注目して、それぞれに該当する項目への回答が「かなり用いた」と「ある程度」用いたを「1」とし、「全く用いなかった」と「少し用いた」を「0」としてストレス事態で用いたそれぞれの対処の合計値を指標として用いた。なお、「情動中心の対処」の全体の平均値は5.17 ($SD=3.70$)、男子5.44 ($SD=4.05$)、女子4.90 ($SD=3.42$) で、「問題中心の対処」については、全体の平均値は5.11 ($SD=4.01$)、男子5.56 ($SD=4.37$)、女子4.65 ($SD=3.57$) であった。また、両ストラテ

ジー共に学年差および性差はみられなかった。

4. 一般統制感 統制感尺度は、とりうる得点の範囲は26~104点で高得点であるほど高い一般統制感を持つことを示す。本サンプルの平均値は72.71 ($SD=14.71$)、男子71.86 ($SD=16.54$)、女子73.57 ($SD=12.64$) であった。また、学年間、男女間に有意差はみられなかった。さらに、 α 係数は.79であった。

なお、以下の分析では、欠落データの無い145名(男子73名、女子72名)を分析の対象とした。

一般統制感、最初の感情反応、対処法の関連

まず、一般統制感がストレス事態での最初の感情に影響を有するか否かを確認するために一般統制感を説明変数、「立ち向かい」的感情(以下「立ち向かい」)及び「落ち込み」的感情(以下「落ち込み」)を基準変数とした単回帰分析を行った。その結果、一般統制感「立ち向かい」に対してのみパスが有意となった(Table 3)。さらに、一般統制感、「立ち向かい」及び「落ち込み」のそれぞれが、対処行動に対して与える影響を検討するために、一般統制感、「立ち向かい」

Table 3 「立ち向かい」と反応と「落ち込み」反応に対する単回帰分析の結果

説明変数 / 基準変数	「落ち込み」反応	「立ち向かい」反応
一般統制感	.05	.25***

*** $p<.001$

表内の数字は単回帰係数

Table 4 「情動中心の対処」と「問題中心の対処」に対する重回帰分析の結果

基準変数 説明変数	「情動中心の対処」		「問題中心の対処」	
	β	r	β	r
一般統制感	.06	.12	.28***	.37***
落ち込み反応	.34***	.39***	.04	.15
立ち向かい反応	.18*	.24***	.33***	.41***
重相関係数	.44***		.49***	

*** $p<.001$ * $p<.05$ 、 β は標準偏回帰係数、rは積率相関係数

Table 5 一般統制感の高低による各変数の平均

	全 体 N=145	一般統制感低群 N=71	一般統制感高群 N=74
落ち込み反応	10.64(4.59)	10.40(4.92)	10.86(4.28)
立ち向かい反応	11.56(4.14)	10.07(4.18)	12.38(3.97)
情動中心の対処	5.17(3.74)	4.83(3.83)	5.50(3.66)
問題中心の対処	5.11(4.01)	3.94(3.50)	6.23(4.16)

() 内は標準偏差

及び「落ち込み」を説明変数、「情動中心の対処」と「問題中心の対処」のそれぞれを基準変数とする重回帰分析 (Table 4) では、重相関係数はそれぞれ有意となった。「情動中心の対処」に対しては、「落ち込み」からの影響が有意となり、「立ち向かい」からは有意な弱い影響がみられた。また「問題中心の対処」については、一般統制感と「立ち向かい」からの影響が有意となったが、「落ち込み」は有意ではなかった。

次に一般統制感の高低の差異との関係を検討するために、一般統制感得点の平均値をもって2分し、一般統制感高群と低群とした (Table 5 に一般統制感の高・低による各変数の平均値を示す)。これを基に「立ち向かい」を従属変数、一般統制感と性別を独立変数とする2要因4水準の分散分析を行った。その結果、一般統制感の主効果のみが有意であった ($F(1,141)=6.35, p<.02$)。さらに問題中心の対処を従属変数、一般統制感を独立変数、「立ち向かい」を共変量とする1要因2水準の分析では、 $F(1,142)=7.75 (p<.01)$ と有意な結果を得た。これらのことは、一般統制感高群がストレス事態で最初に「立ち向かい」を示し、対処行動においても「問題中心の対処」を示す傾向が高いことを示している。

考 察

本研究では、中学生のストレス対処過程においてストレス事態に最初に遭遇した際に感情的反応が生起するとの仮定に立ち、一般統制感とその過程において果たす役割について検討した。その結果、単回帰分析と

重回帰分析によって最初に生起すると考えられる感情的反応のうち「立ち向かい」については、一般統制感からの影響が有意であるという結果が得られた。一方「落ち込み」に関しては、有意な影響は確認できなかった。また、対処行動については、一般統制感と「立ち向かい」からの「問題中心の対処」への影響が有意であった。「情動中心の対処」については「落ち込み」からの有意な影響と「立ち向かい」からは有意ではあるが弱い影響が得られたが、一般統制感との関連性は確認できなかった。

上記の結果は、人がストレスサーに出遭った時に一般統制感を背景にした「立ち向かい」的感情が、まず生起するという仮説を裏付ける一つのデータを示すものと考えられる。同時に「立ち向かい」から「問題中心の対処」に至る対処のプロセス全体に一般統制感が影響を与える可能性を示すものと言えよう。しかし「落ち込み」反応や「情動中心の対処」については、仮説では低一般統制感では自分の行動が望んだ結果を生み出し難いと期待する傾向が強いため、ストレス事態に直面したとき、まずネガティブな感情が生起することが考えられた。さらに、対処としてはストレス事態への効果的な対処方法を見つけ出すことを最初から放棄し、その事態からの回避や自分のネガティブな感情をコントロールすることに関心が向けられると予想されたのであるが、今回はこれが支持されなかった。このことは、一般統制感ではこの過程を説明できないことを示しているのかもしれない。今後「落ち込み」反応、「情動中心の対処」の検討にあたって、他の変数の導入も考慮する必要があるだろう。

続いて一般統制感の高低による最初の感情的反応と対処行動の差異を検討した。一般統制感高群は低群に比べ高い「立ち向かい」反応を示すと共に、「問題中心の対処」を行うことが示された。「問題中心の対処」については「立ち向かい」反応の影響を除いてもその関係は維持されていた。明らかに高一般統制感、具体的な行動によるストレス事態への対処に影響を与える重要な要因であると言えよう。

これらのことから中学生の心理的ストレス過程に一般統制感が、「立ち向かい」反応と「問題中心の対処」に一定の役割を果たすことが示唆された。つまり一般統制感が新奇で曖昧な状況だけでなく特定のストレス状況への対処に影響を与える可能性である。ストレス事態に直面する場合、中学生がそれに対して「立ち向かおう」という反応やストレス事態に効果的、積極的に関わることで解決を図ろうとするためには、高い一般統制感を持つことが有力な要因の一つであるといえる。すでに指摘したように一般統制感自分のさまざまな過去経験に基づいて形成される一般的期待であるので、一般統制感を高めることによって、その個人の生活領域で経験される多くのストレス状況下で、まずストレスに対して、ストレス状況を分析し、どうすることがストレスを克服することに有効であるか積極的に探索し、効果的な対処行動をとることが期待される。

中学生の心理的ストレス過程について、三浦・坂野(1996)はストレスとして「学業活動」と「友人関係」を取り上げ検討を行っている。その中でそれぞれのストレスについて Lazarus ら(1984)の想定した「ストレス→認知的評価→コーピング→ストレス反応」を支持する結果をパス解析によって得ている。つまり、中学生がストレス事態に遭遇したときに行う認知的評価がストレス事態での対処の仕方やストレス反応に重要な役割を果たすことを示している。したがって「ストレス→認知的評価→コーピング→ストレス反応」という流れは確認された事実であると言えよう。本研究では心理的ストレス過程に「ストレス」と「認知的評価」の間に「感情的反応」を想定したのであるが、回答を依頼した中学生の負担も考慮し、認知的評価を変数として取り上げなかったた

め心理的ストレス過程全体を視野に入れた検討がなされなかった。したがって、「ストレス→感情的反応→認知的評価→対処行動→ストレス反応」というプロセスについて確認することができなかった。この点に関しては、「落ち込み」反応、「情動中心の対処」に影響する要因も含めて検討する必要がある。これらを検討することによって、心理的ストレス過程における一般統制感と最初の感情的反応の働きを明確にすることができると考えられる。

次に、多様なストレス事態に遭遇した時に常にストレスに対して積極的対処をとることがよい結果を生むとは限らない。ある場合には、何もしないことがよい結果をもたらす場合もある。この時、自分が何もしないことをいくつかの対処行動の中から選択したのか、それとも諦めて最初から何もしなかったのか、という点に注目し、一般統制感からの検討が可能である。本研究のこれまでの論議から、諦めて最初から何もしない(低一般統制感)の場合は、多くの事態でも同じようにすることが考えられる。一方、多くの対処行動の中からそれを選択して、ストレス事態にうまく対処できた(高一般統制感)の場合は、他のストレス事態ではその状況を的確に把握し、自分の持つ対処行動の中から適切な対処を選択する可能性が高いと考えられる。これについても「情動中心の対処」と「問題中心の対処」という対処のストラテジーだけでなく、「直接行為」、「行為の抑制」、「情報収集」、「認知的対処」などの8つの対処のモード(Lazarus & Folkman, 1984)といった視点からの検討が求められよう。

また、心理的ストレス過程において一般統制感が一定の機能を果たすことがさらに明確になれば、中学生をはじめとする子どもたちに高一般統制感を形成するためには、どのようなことが必要とされるのかも明確にしていくことが求められることになる。高一般統制感自らの先行経験に基づいて、自分の行動と結果の間に高い随伴関係を期待するのであるから、さまざまな状況下で行動と結果の間の随伴関係を経験させることが考えられる。しかし、現在多くの子どもたちを取り巻く状況は、勉強それ自体は悪くないものの、勉強に関することのみが周囲の大人たちによって強調され、その領域で勝つか負けるかがすべてを決めるかのよう

に扱われている。これでは広範な経験に基づいた一般統制感が形成されにくいと考えられる。

Crandall & Crandall (1983) によれば、子どもに高一般統制感を形成する親の養育態度は、「愛情表出的」や子どもに「選択・裁量の自由を与える」などであるという。また、Erikson (1959) によれば、小学生の時期に経験される危機は「勤勉性と劣等感」の葛藤であり、勤勉性が勝利をおさめると「有能感 (competence)」が獲得されるとしている。この「有能感」は、「自分の適性に気づいていて、自分の得意なことに関しては、やればある程度のことは達成できて...」(吉田, 1995) ということを含んでおり、一般統制感とかなり類似する点を持っている。この有能感の形成には、自分が行動を起こし期待した結果を得るだけでなく、そうした結果が得られたことを心から共に喜んでくれる家族や教師などの存在が不可欠であるとしている。これらのことを考慮すると、単に行動と結果との随伴関係だけでなく、こうした周囲の関わりを含めて一般統制感の育成を考えていくことが求められよう。

最後に本研究の限界と研究の今後の方向性について考えたい。本研究では、人がストレス自体に遭遇する時、Lazarus らのモデルの認知的評価のプロセスが始まる以前に、その個人の一般統制感を背景にした「感情的反応」が生起するとの仮説のもとに進めた。しかし特定期待としての統制感を背景とした「感情的反応」が認知的評価のプロセスや対処行動においても生起することも考えられる。この場合、本研究では、両者の識別が必ずしも明確にされているとは言えない点もある。このため「認知的評価の前の感情的反応」「対処行動をしている時の感情的反応」や「対処行動後の感情的反応」などの測定を行ない、その点を明確にする必要があると考えられる。

引用文献

- Brissett, M. & Nowicki, S. Jr. 1973 Internal versus external control of reinforcement and reaction to frustration. *Journal of Personality*, 25, 35-44.
- Crandall, V. C. & Crandall, B. W. 1983 Maternal and childhood behaviors as antecedents of internal exter-

- nal control; Perception in young adulthood. In Lefcourt, H. M. (Ed.) *Research with locus of control construct*. London: Academic Press.
- Erikson, E. H. 1959 Identity and Life Cycles. *Psychological Issues*, No. 1. New York: International Universities Press. (小此木啓吾 訳編 1973 自我同一性—アイデンティティとライフサイクル— 誠信書房)
- 神田信彦 1993 子ども用一般主観的統制感尺度の作成と妥当性の検討 教育心理学研究, 41, 275-283.
- Lazarus, R. S. & Folkman, S. 1984 Stress, Appraisal and Coping. New York: Springer (本明寛・春木豊・織田正美訳 1991 ストレスの心理学 実務教育出版)
- 三浦正江・坂野雄二 1996 中学生における心理的ストレスの経時変化 教育心理学研究, 44, 368-378.
- 水口禮治・加藤啓・神田信彦 1990 非行少年の Locus of control に関する研究—一般少年との主観的統制感の差について— 日本社会心理学会第31回大会発表論文集, 64-65.
- 大木桃代 1993 中学生のストレス対処法 I 日本健康心理学会第6回大会発表論文集 42-43.
- Pines, E. J. & Julian J. W. 1972 Effects of task and social demands on locus of control differences in information processing. *Journal of Personality*, 40, 407-416.
- Phares, E. J. 1968 Differential utilization of information as a function of internal external control. *Journal of Personality*, 36, 649-662.
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancies for internal versus external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- 吉田圭吾 1995 人間関係の心理臨床 澤田端也 編 人間関係の生涯発達. 培風館.

謝 辞

本研究の実施にあたり、質問紙への回答をしていた生徒の皆さん、調査の実施にご協力いただいた先生をはじめ学校関係者の方々に心より感謝いたします。

(1997.8.28受稿, 1998.5.7受理)